人間を救うのは、人間だ。Our world. Your move.

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

複雑化する世界の中で
今求められる人道支援とは

赤十字シンポジウム

2016

報告書

RED CROSS SYMPOSIUM 2016

赤十字シンポジウム

2016

報告書

■開催日時■

2016年11月12日(土)

開場/13:00　開演/13:30　終了/15:30

■会　場■

表参道ヒルズ　スペース オー

東京都渋谷区神宮前4-12-10（表参道ヒルズ本館地下3階）

■主　催■

日本赤十字社 Japanese Red Cross Society　NHK

■後　援■

外務省、厚生労働省、NHK厚生文化事業団

■協　力■

赤十字国際委員会（ICRC）、日本看護協会、商店街振興組合原宿表参道欅会

■放送日時■

2016年12月3日（土）
NHK　Eテレ「TVシンポジウム」（14：00～14：59）
（近畿ブロックのみ12月10日（土）13：00~放送）

この報告書は、2016年11月12日（土）に行われた「赤十字シンポジウム2016」のディスカッションをまとめたものです。

赤十字シンポジウムは今年30周年を迎えました。

その間、多発する紛争、自然災害、難民・移民の問題、貧富の格差、新興感染症などにより、

支援を必要とする人は過去最多となっています。

もはや一国家、一組織ではこれらの人道課題に対応することはできず、国境を越えた連携が求められています。

一方、移民の受け入れ拒否、英国のEU離脱など反グローバリズムの動きも出ています。

このような中、今年5月にトルコ・イスタンブールで開催された「世界人道サミット」では、

「一人でも多くの人のいのちを救い、より効率的で効果的な人道支援を実現する」ための方策が話し合われました。

多様な文化と共生、地域社会の強化、ボランティア、イノベーションなど今求められる人道支援のあり方とは？

今回の赤十字シンポジウムでは、過去のシンポジウムでの議論を踏まえて、

これからの人道支援のあり方を、共に考えていく機会とします。

RED CROSS SYMPOSIUM 2016

出演者プロフィール/PROFILE

田中 明彦
TANAKA AKIHIKO

東京大学 東洋文化研究所教授　**パネリスト** PANELIST

前国際協力機構（JICA）理事長。東京大学東洋文化研究所教授・所長、大学院情報学環教授、国際連携本部長、理事、副学長などを歴任。2015年より現職。著書に『新しい「中世」』（日本経済新聞社、1996年、サントリー学芸賞受賞）、『ワード・ポリティクス』（筑摩書房、2000年、読売・吉野作造賞受賞）、『ポスト・クライシスの世界』（日本経済新聞出版社、2009年）など。

森田 正隆
MORITA MASATAKA

明治学院大学 経済学部経営学科教授　**パネリスト** PANELIST

経営情報システム、マーケティング情報システム、コミュニケーションについて研究。「ともに生きる社会の経営学」を提唱。2014年より、経営者の視点、社会貢献ビジネスの両立、2015年より世界市民としての視点、人道、人権、多様な価値の受容を学ぶ経営学特別講座を実施している。

安田 菜津紀
YASUDA NATSUKI

フォトジャーナリスト　**パネリスト** PANELIST

studio AFTERMODE所属フォトジャーナリスト。16歳のとき、「国境なき子どもたち」友情のレポーターとしてカンボジアで貧困にさらされる子どもたちを取材。現在、カンボジアを中心に、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を行う。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。2012年、「HIVと共に生まれる―ウガンダのエイズ孤児たち―」で第８回名取洋之助写真賞受賞。写真絵本に『それでも、海へ 陸前高田に生きる』（ポプラ社）、著書に『君とまた、あの場所へ シリア難民の明日』（新潮社）。

近衞 忠煇
KONOE TADATERU

日本赤十字社社長／国際赤十字・赤新月社連盟会長　**パネリスト** PANELIST

1964年に日本赤十字社入社、2005年より社長。救護、血液、看護師養成、人道支援活動など赤十字事業に幅広く関わる。2009年より世界190か国の赤十字・赤新月社から構成される国際赤十字・赤新月社連盟の会長。世界各国の紛争地域や災害被災地を訪れ、「人道の空白地帯を作らない」をモットーに人道外交に取り組む。

宮崎 緑
MIYAZAKI MIDORI

千葉商科大学 国際教養学部教授・学部長　**コーディネーター** COORDINATOR

政策情報学部長を２期務めた後、2015年に新設した国際教養学部の学部長に就任。政府税制調査会委員、衆議院選挙区画定審議会委員、医道審議会委員、計量行政審議会委員、など国の政策決定過程に参画。東京都教育委員。NHKの報道番組「ニュースセンター 9時」で初の女性ニュースキャスターを務めた。第１回赤十字シンポジウムにコーディネーターとして出演している。

赤十字シンポジウム

2016

CONTENTS

オープニング

①人道支援の今

②今 世界で起きている変化とは？
そして人道支援の現実とは？

③今 求められる人道支援とは？

④会場の声

⑤まとめ

RED CROSS SYMPOSIUM 2016

●オープニング
～オープニング映像より～

宮　崎:こんにちは。

世界はかつてないほど複雑化しております。そうした中で、どのような人道支援が、今、求められているのか。『赤十字シンポジウム・第30回目』を開催させていただきます。

私は、本日のコーディネーターを務めさせていただきます宮崎緑と申します。よろしくお願い申し上げます。

それでは、パネリストの皆さんをご紹介したいと思います。

まずは、東京大学東洋文化研究所教授、国際協力機構の前JICA理事長でもいらっしゃいました田中明彦さんです。今日は、国際政治学のプロとしてご発言いただきます。

明治学院大学経済学部経営学科教授森田正隆さんです。森田さんのご専門は経営学。社会貢献の視点を入れたビジネスがテーマです。今日は世界市民として、いかに社会を築くのかという観点から、そして大学の先生として教育のプロとしてもご発言いただきます。

田中明彦／東京大学教授

森田正隆／明治学院大学教授

安田菜津紀／スタディオアフタモード

近衛忠煇／日本赤十字社社長

フォトジャーナリストの安田菜津紀さん。シリア難民の方への取材や、東日本大震災の被災地の取材など、常に現場の方々によりそって発信されていらっしゃいます。今日は伝えるプロとしてご発言いただきます。

さらに、日本赤十字社からは国際赤十字・赤新月社連盟会長も務めていらっしゃる近衛忠煇社長が参加いたします。現場の経験は豊富。そして人道支援一筋、53年というプロです。

さて、アメリカ大統領選挙での国民の選択。英国のEU離脱の問題。世界で後を絶たないテロの問題等々、まさに今、世界はかつてないほど複雑化しております。赤十字シンポジウムは今年30回目ですが、実は私は第1回目にやはりコーディネーターとして参加させていただきました。この30年で世界も日本も大きく変わっております。日本はバブルを、そしてバブル崩壊を経験し、世界第2位の経済大国の位置付けを中国に譲りまして、今、第3位になりました。世界も大きく揺らいでおります。後を絶たない紛争や難民の問題。あるいはそれだけではなくて、エボラ出血熱など、新しい感染症出現もありました。自然災害も各地で起きております。支援を求める人たちは過去最大になっているという状況であります。

こういう中で、どのような人道支援のあり方が求められているのかというのが今日のテーマであります。まずは、お一人お一人がどのような立場から、今日臨んでくださっているのか、お人柄が分かるような自己紹介の一言メッセージをいただきたいと思います。人道支援の最たるものの1つと位置付けられるこの赤十字の活動ですが、この赤十字の活動について、どんなところがユニークだと思っていらっしゃるか、順番に伺います。

まず、田中さん、お願いします。

田　中:こんにちは。ご紹介いただきましたように、昨年まで、国際協力機構（JICA）の理事長をしておりました。その活動の中で、Red Crossは何と言っても国際ネットワークと人道性。この辺が一番の特徴と感じるところです。JICAにも緊急援助隊はありまして、何かあると行くのですが、どこへ行ってもRed Crossがまずいます。これは、日本赤十字社もその一環となっている国際的な国際赤十字のネットワークです。

世界中で困っている人がいたら速やかに誰でも助ける。これが赤十字のユニークなところだと思っています。

宮　崎:はい。ありがとうございます。まさにシンボルであるということですね。それでは、森田さんお願いいたします。

森　田:私ども明治学院大学は、3年前に日本赤十字社とボランティアパートナーシップを結ばせていただきました。そのご縁がありまして、昨年度から赤十字パートナーシップ講座という授業を担当し、学生と一緒に人道や人権を勉強しています。その中で、赤十字の活動のユニークなところというと、これはまさに今日のテーマでもありますが、基本的に人道の問題に特化しているところだと思います。

私の解釈では、人道とは人間の生命、健康、そして尊厳に関わる事柄であって、基本的な人権よりもさらにもっと基本的な、人間として最も侵されたくない根幹の部分だと思います。赤十字というのは、平和や幸福というような高い目標を掲げると言うよりは、人間の最も基本的な部分が何らかの原因、例えば、災害や紛争で大きく損なわれるシーンがあ

れば、そこにいち早く駆けつけて、そのネガティブな状態を回復しようということに取り組んでいる。そういう意味でスピードと成果、これを重視して、そしてその危機にさらされた状況からの回復に向けて行動していく。すなわち、思想家ではなく現実家、批評家ではなく行動者の側面があると思います。その中のベースとなっている最も大事なものは人道だと思います。

人々の生命、健康、尊厳というものは、国や民族、あるいは宗教やイデオロギーの違いを超越して、この21世紀、我々人類が普遍的に共有できる価値観ではないかという視点で、学生と一緒に勉強しながら教育に携わっております。

宮　崎:ありがとうございます。では、安田さんにお願いしましょう。

安　田:皆さん、こんにちは。フォトジャーナリストの安田菜津紀と申します。普段は、東南アジアやアフリカ、中東で難民の問題、あるいは貧困問題、災害について取材／発信をしています。東日本大震災以降は、岩手県の陸前高田市を中心に国内でも取材をしています。田中さんがおっしゃったことに近いのですが、本当にどんな現場に行っても必ず赤十字の活動を目にします。ですので、一言で表現をすると、信用と信頼ではないかなと思います。

信用というのはこれまでの活動の積み重ね。どこに行っても名前を聞く。ああ赤十字ねと皆が理解をしてくれるということです。だからこそ信頼できる。そして、これらへの期待感というものが重なり合っているのが、まさに赤十字を体現しているものではないかとあらためて思います。

宮　崎:ありがとうございます。では、その信用と信頼を一身に担いまして、近衛さん、一言お願いいたします。

近　衛:その信頼に応えるように、日々努力しているわけですが、昨日アメリカの大統領選挙ではポリティカル・コレクトネス（人種別・性別などによる差別廃止の立場で政治的に正しい）というようなことが言われました。それに対する反対と言いますか、批判があって、トランプさんが大統領に選ばれた。赤十字は、ある意味では人道的なコレクトネス、そのスタンダード作りを100年以上にわたってやってきたのではないかと思います。その赤十字が作ってきた原則。例えば、人道、公平、中立、あるいは独立といった原則が、今、国連機関をはじめとしてほとんどの国際的な人道団体でシェアされるようになってきている。

ただ、それが守られていない、守られなくなってきている現実もあるということで、まさに、この人道のコレクトネスもチャレンジを受けていると強く感じています。この原則を共有しているということが、赤十字の特色であるし、その原則を共有することによって世界的な人道のネットワークを作っている。それが特色であると思います。

宮　崎:ありがとうございます。ポリティカル・コレクトネス、アメリカで偏見・差別のない表現は政治的に妥当である、という意味で使われるようになったポリティカリー・コレクト又はポリティカル・コレクトネスという言葉ですが、独立、中立、公平も含めて新たな課題になっているのではないかと思います。さて、そういう角度から様々に人道の問題に取り組んでいらしたパネリストの方々が、今、現状をどう認識していらっしゃるかということを、またお話を伺いたいと思います。

これまでの活動、支援などの中で、ご自分が出会った最も心に残ったこと、あるいは最も深く印象として持っていらっしゃることをお伺いできますでしょうか。安田さん、如何でしょうか。

①人道支援の今

安　田:今、紛争が続いているシリアから逃れて来た人たちの取材を続けているのですが、南側の国境を越えたヨルダンという国で、傷ついて病院に運ばれて来たアブドラ君という男の子に出会いました。爆撃の破片が頭に刺さって、ほとんど意識がないような状態だったのですが、その時私は彼の写真を撮って、一緒に避難して来たお母さんにあげました。もちろん、決して幸せな瞬間を写した写真ではないのですが、お母さんは、わ〜!と手を叩いて喜んで、ありがとうと言ってくださいました。戦火から逃れて来たから、アブドラが小さかった頃の思い出の写真が残ってないの。今度はアブドラが元気になって外を走り回っている様子を撮りに来てちょうだいと、とても嬉しそうでした。しかし、お医者さんが手を尽くしたにも関わらず、残念ながら1週間後にアブドラ君は亡くなってしまいました。

シャッターを切る度に色々な願いを込めます。まずは目の前にいる子どもたちが回復しますようにということと、これ以上同じ思いをする子どもたちが現れませんようにと願いを込めてシャッターを切るのですが、毎回それが打ち砕かれてしまう。これはやはり慣れることはないですし、なぜだろう、どうしてだろうという問いに、まだ自分の中でも答えが出ていないからこそ、今日は皆さんと一緒に考えることができればと思っております。

宮　崎:ありがとうございます。田中さんは如何でしょうか。

田　中:フィリピンの南の方にミンダナオ島という島があります。このミンダナオ島の西の方では、1960年頃から武装闘争、政府軍とモロ・イスラム解放戦線という内戦がかなり長い間続いていました。ここに、2006年頃からJICAの職員が国際監視団の一員として社会経済援助を行ってきました。2012年にJICAの理事長になった最初に、私はこのミンダナオ島に行きまして、そこのMILF（モロ・イスラム解放戦線）というゲリラの本拠地のキャンプに入り、そのゲリラの首脳陣と会見して和平の見通しを聞きました。その時はキャンプの周りに少年が銃を持って並んで迎えられたのですが、その後、幸いなことにフィリピン政府とMILFとの和平合意が進み、2014年に包括和平合意にいたりました。

昨年の8月末、私のJICAでの最後の仕事として、やはりまたミンダナオ島に行き、同じMILFの軍事キャンプに行ってきました。3年前と比べるとうって変わったように平穏・無事で、ゲリラのキャンプというよりはコミュニティセンターみたいだと思いました。その近くにあるコタバトという街も、3年前に比べるとずいぶん夜が明るくなっていました。和平が実現するというのはこんなによいことなんだと実感した次第です。

宮　崎:ありがとうございます。一人ひとりの人生や生きるということは、色々な形があります。安田さんは悲しい形で迎えましたけれども、田中さんは、もう平和になったという実感。これは、大変大きな話ではないかと思います。森田さんは如何でしょうか。

森　田:実は3年前に日本赤十字社とパートナーシップを結ぶまで、こういう人道支援の問題にそれほど関心がありませんでした。私は、経営学が専門ですのでビジネスのことを考えていました。昨年から全15回の赤十字パートナーシップ講座を始めて、毎回、日赤の方や国連難民高等弁務官事務所の方などに、いわゆる災害救援の場、医療救援の場、あるいは伝染病対策、そういうある種、命の危険のあるところに出かけて行って、そこでどういう活動をされているかということを、現場に出られている当事者にお話ししていただき、それを学生と一緒に考えるということを繰り返してきました。

そうすると私自身もそうですけれども、学生の口から出るのは、先生、モヤモヤ感が高まっていきますね、という話なのです。すなわち、これまでこんなことは知らなかった。こんな悲惨なことが、民族同士が殺し合ってあって、でもどちらがよいとも悪いとも言えないとか、あるいはエボラ出血熱に感染した地域で、その現地の風習や風俗を守ると感染を拡げてしまうことになる。でも、頭ごなしに言うことはできない。そうなると、先生、問題も明らかだし、深刻なのは分かるけれども、解決策がなかなかない。それ以上にモヤモヤが溜まるのは、知ったところで私には何もできない。だから罪悪感を感じる、あるいは無力感を感じるという話だったのです。

そのような中で、毎回90分、全15回の授業が終わって、最終回に受講生全員で車座になってディスカッションをしました。この15回、我々は何を学んだだろうかと。私自身も感じるところはあったのですが、学生たちからは自分の心の中に罪悪感みたいなものが高まっていくし、最初は知らないほうが良かったと思っていた。ところが最後に車座になってディスカッションをする中で、いや、でもやはり知って良かった。この痛みを感じるということが、何かの出発点になるのではないだろうか。そしてこの痛みを感じるということが、何か些細なことでも、行動に結びつくようなことができるのではないかと考えて、シリアには行けないけれども、先生、献血に行くようになりましたとか、あるいはちょっとボランティアをしてみようという気になりましたと、学生たち何人かが発言してくれました。

私自身はそういう意味で、ここにいらっしゃる方に比べると、遥かにこういう問題に無関心だった人間なわけですが、知ることで、感じることで態度が変わり行動が変わるということを、この講座をやるなかで体験させていただきました。その時の学生の目の色の変わり方というのが、私にとってはこの数年間で忘れられない体験の1つです。

宮　崎:ありがとうございます。今日は後ほど、会場の皆さまからの声を伺う機会も作りたいと思っております。特に若い方々には想うところがあれば、是非、ご意見、質問などをしていただきたいと思います。近衛さんは如何ですか。

近　衛:今、森田さんからエボラの話が少し出ましたが、この1月にエボラ出血熱で大騒ぎになったアフリカの2か国を回ってきました。ご承知の通り、エボラ出血熱というのは治療法がほとんどなくて、感染した3分の1くらいの方が亡くなりました。それが流行りだした時に、先進国からドッと人が行ったり、薬を持ち込んだり、物を持ち込んだりしたわけですが、宇宙服みたいな白い防護服を着た人たちが来て、隔離をしないと危ないと言う。要するに接触感染ですから隔離をしなければいけない。でも隔離をしてもほとんどの方が亡くなって、遺体も帰って来ない。そのような状況で、現地の地域住民も非常に反発した訳ですが、結局どうしたらうまくいったかというと、現地で大体1万人くらいのボランティアを養成して、彼らがその地域を回り、そこの有力者やあるいは宗教の指導者、そういう人たちに何が危険なんだということを教える。啓発活動をする。そして、ただ遺体をどこか知らない所に埋めてしまうのではなく、尊厳のある埋葬という概念を取り入れる。ですからギニアでは、遺体の収容はほとんど100%、地元の赤十字、それもほとんどボランティアが手掛けていたわけです。

村で遺体埋葬の際に尊厳をもって祈りを捧げるチーム
©IFRC

遺体埋葬チームの準備
©IFRC

©IFRC

©IFRC

あのような事態になった時に、事態に陥って初めて国際社会が大騒ぎして物や人を送り込む、あるいは金を注ぎ込む。そのようなことでは解決しない問題があるということを、非常に強く感じました。実際にその手足になるのはボランティアたちであったということです。つまり、日頃から途上国の衛生問題、保健などの問題にあまり力を注がずに、何か起きた時だけ大騒ぎをするのでは、あのような事態は繰り返されるのではないかと強く感じました。

宮　崎:ありがとうございます。私自身、かつてカンボジアの難民キャンプに行った時、家族を殺されたために孤児になった四つ五つの小さい子たちが、何か地面から物を拾って遊んでいるような光景を見ました。よく見たら小石を拾って口に入れていまして、お腹が空いているので石でも食べてしまうのです。この状態を見て、やはり私でも何かできることはないかと思いまして、困ってることは、何?私にできることはないですかと、質問をしたところ、4つ5つの小さな子どもが、こちらが敵か味方かわかりませんから顔色を窺いながら、いいえ、私たちはこれ以上欲しいものはありません。政府の政策に満足ですと答えたのです。つまり、何と答えれば生き延びることができるかということを、これも1つのポリティカル・コレクトネスではないでしょうか。誰が教えたわけでもないのに覚えてしまっている。この現実に心がストンと落ちるような気がしまして、頭で考えるのではなく心で感じるというのをモットーにしてもなお足りない、腹を突き刺す痛み、これをどうしたらよいのだろうかという想いに囚われました。こういうことから考えても、今パネリストの方々がおっしゃっていたように、戦争、紛争、武力紛争の中で生まれる難民だけではなくて、今日、世界が抱えている問題は、感染症であるとか災害で被災した方々の様々な事情を抱えて救助を求めていて、その対応についても、文化の差や、経済の差、様々な問題が縦横に組み合わさっているということが浮かび上がってきているのではないかと思います。

②今世界で起きている変化とは?そして人道支援の現実とは?

宮　崎:田中さんにお伺いしますが、今、支援を求めている人がかつてないほど多いというデータが出ている。これはどうして、そのようなことになってしまったのでしょうか。

田　中:これは、なかなか難しい問題です。まず、国際紛争に限って言いますと、冷戦が終わって1989年頃から21世紀の初めくらいまで、国と国との間の戦争というのは比較的少なくなり、内戦も比較的収まりかけていました。しかし2011～2年頃から、各地でまた紛争が激化する兆候が出てきて、とりわけシリアの内戦の烈度が強くなりました。その結果、難民やあるいは国内避難民、それからその2つのカテゴリーに入らないのに移動せざるを得なくなった人たち、こういう人たちの数が第二次世界大戦後で最大の数になっているわけです。この方々は、今申し上げたようにシリアを中心に増加し、その人々がヨーロッパに行くということでニュースになったりしていますが、中東だけではなくて、アフガニスタン、パキスタン、それからサブサハラ・アフリカのスーダンや南スーダン、コンゴ民主共和国、この辺りからも大変多くの国内避難民が出ているというのが現状です。

これに加えて、先程お話があったように、感染症の問題もあります。西アフリカの3つの国でエボラ出血熱の大災害がありました。また、日本では東日本大震災があり、それからほどなくしてネパールでの大地震、台風がフィリピンやハイチを襲ったりがあります。

今この自然災害や感染症の発生がどのくらいの頻度で起こり、それが上昇傾向にあるのか、減少傾向にあるのかは、専門ではないのでよく分かりませんが、この紛争、災害、感染症の3つが関連する可能性もあって、国際社会が直面している困難を抱えた人が増えている。それに対して国際社会がどうやって対応するのか、非常な大きな問題に直面している時期だと思います。

宮　崎:様々な原因が紛争、災害、感染症だけではなくて、それがまた関連してしまう。災害が起きて大変な状況にあるから、感染症が避難キャンプで広がってしまうなど、連関していくわけでしょうか。そして、全ての問題の根源に実は貧困

の問題があるのではないかということも指摘されているのですが、近衛さん、そのあたりの因果関係というのでしょうか、どのようにご覧になっていらっしゃいますか。

近　衛:そうですね。紛争、災害、感染症への緊急救援と貧困への開発協力のようなことを結びつけるのはどうかという意見もあります。今年、世界人道サミットという、世界で初めて各国のトップや国際機関が一堂に会し、共通の人道的課題について議論する会議が開かれたのですが、その時にも、その考えは人道支援に関する議題を開発・平和機構・政治議題に拡散させてしまう恐れがあり、正しくないといって会議に出なかった団体もありました。基本的には人道支援の場合、国内でもよく言われることですが、自助、共助、公助というようなことが言われます。自助というのは、災害というか人道危機に耐える力、あるいは立ち直る力。最近、このことを指すレジリエンスという言葉が、国際的にも非常に流行っています。日本語で適した訳がないのですが、このレジリエンスを強化することによって何かあった時に耐える。あるいは海外から少し支援を受ければ立ち直れる。そういう環境づくりをしていこうということです。

国際赤十字では、昨年仙台で開かれた国連防災世界会議の時に、世界中で10億人のレジリエンス強化の輪づくりをしようではないかという提唱をしました。これは、大変野心的に聞こえますけれども、割合と現実的な目標であって、赤十字だけでやろうという話ではなく、色々な人たちと手を組んで、その中には貧困への取り組みということも当然入ってくると思います。

次に、共助という点では、これは地域社会のたすけあいの仕組みづくりをしていこうということになろうかと思います。その最たる中心は、やはり地域社会に根ざしているボランティア。これは行政に全部任せているわけには行かないだろうから、ボランティアにお願いをする。このボランティアたちをまとめて活動しているのが、赤十字で言えば、それぞれの国の赤十字社、あるいはイスラム圏では、赤新月社。そういうところの能力アップをしていこうではないかという戦略を立てています。

公助というのは、一般的には個人や地域社会で解決できない問題について国や自治体が支援を行うという意味ですが、赤十字で言えば、世界の人道問題に対処するために国際赤十字・赤新月社連盟や赤十字国際委員会のような国際的な支援の仕組みがあるという意味です。

宮　崎:ありがとうございます。自助、共助、公助、これを本当にできれば良いと思いますが、安田さん、現地に行ってみるとこれは生易しいものではないのではと思いますが如何でしょうか。例えば公助といっても支援物資で最先端の素晴らしい機械が届いても、電気が通っていないから動かせないということや、義足を送ったけれども壊れた時に修理をする技術がないとか、なかなかその現実は難しいところもあると思うのですが、現場でご覧になって感じることはありますか。

安　田:そうですね。自助という意味でいうと、例えば傷ついて逃れて来た人たちだけでそれをやり切るというのはやはり限界があるだろうということは感じています。例えば今、シリアから逃れて来た方々というのは、もちろん、キャンプに暮らしていらっしゃる方もいるのですが、中には環境が厳しいということで、都市部に転居する方も非常に多いです。そうして、点在してしまうことによって、どこで支援がもらえるらしいとか、どこに申し込めば何か助けてもらえるらしいという、必要な情報から分断されてしまうこともあります。そうなると、どんどん、生活が苦しくなっていく。私がお邪魔させていただいた中で、お子さんが小さなアパートにお母さんと一緒に暮らしていて、お父さんは紛争に巻き込まれてしまって行方が掴めないという家庭がありました。その小さなアパートの片隅にはパンのカケラが積まれていました。何のためのもの?と聞くと、これは食用じゃなくて、家畜の餌として売りに出すためのものなんだよと教えてくれました。どうやって集めているの?とさらに聞くと、朝になって人々が学校や仕事に行く前の時間帯などを狙って子どもたちが住民の出したゴミの中から拾い集めてくる。お母さんは、何とか子どもたちに教育を受けさせたい。でも、子どもたちが学校に行って彼らが働けなくなってしまうと、ウチの家族は収入がどんどん減って家賃が払えなくなる。そして、家賃が自分たちの力で払えなくなると、また紛争の続くシリアに帰らなければいけないかもしれないといった、やはりそういう葛藤が各家庭に続いていました。

宮　崎:悪い循環になるわけですね。

さて、今シリアの話題が出てまいりました。実は今日、サプライズ・ゲストをお招きしております。ミス・ユニバース・ジャパン2016の中沢沙理さんです。

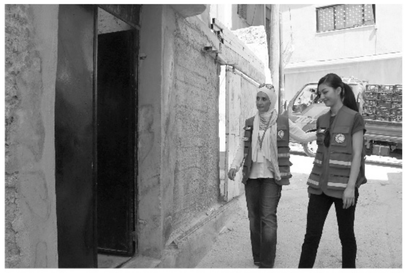
中沢さんは、世界への関心がとても強くて、高校生の時からボランティア研修生としてベトナムやカンボジアなど、孤児院や産院を見学されてきたそうです。今年、自らの意思で日本赤十字社のボランティアとして、ヨルダンのシリア難民のもとを訪れました。その時の体験を語っていただこうと思います。中沢さん、お願いします。

中　沢:こんにちは。ミス・ユニバース2016、日本代表の中沢沙理です。私は現在、大学で歯科医師になるための勉強をしています。この度、赤十字ボランティアとして、シリア難民を訪問するためヨルダンに行きました。

これまで難民と聞くと、キャンプにいる人々を思い描いていました。難民を訪問する、イコール、テントの並んだキャンプに行くと思っており、危険なところに行くのだと身構えていました。

© Iraqi Red Crescent

しかし、訪問したのは、写真のように住宅街にあるアパートにいる人ばかりで、初めて難民キャンプではないところにいる難民の存在を知りました。



実は、ヨルダンに暮らしている難民の80%以上がキャンプではなくアパートで暮らしていると言います。8万人が暮らすザータリ難民キャンプがありますが、それよりも遥かに多くの人がヨルダンの普通の街で避難生活を続けているのです。

私はこれまでこの事実を知らなかったので非常に驚きました。難民の人々は普通の街にいるので外から見るだけでは分かりにくく、そのためこの状況が世界に伝わりにくいのだと改めて思いました。

また、多くの難民を受け入れている国には膨大な負担が掛かっています。一気に多くの人が外から入って来た時にどのような問題が発生するか、皆さん、想像できますでしょうか。私は、自分の通っていた小学校に倍の人が来たらどうなるのだろうと想像しました。例えば、学校では、机や椅子の数が足りなくなる。街では、ゴミがこれまで以上に大量に出る。また、ヨルダンは砂漠の国ですから水の問題も深刻です。多くのヨルダンの小学校では生徒数が一気に増えたため2部制になりました。ヨルダン人は午前中、シリア人は午後といった具合に授業を行っています。そのため、授業時間は半分になってしまいました。

© IFRC

また、シリア難民には人道支援団体からの支援があるのに、貧しいヨルダン人に対する支援はないということで、小さな対立を生んでしまうこともあります。私は、いくつかの家庭を訪問し、避難生活の長くなってきたシリア難民たちがどんどん追い詰められている現状を目の当たりにしました。難民たちは、身に付けているものや家中にあるあらゆるものを売ってお金にしますが、そのお金も底をつくと借金をしなければなりません。難民は労働許可を与えられていないので、モスクに行って物乞いをしたり、日雇いの格安の仕事を見つけたり、子どもを働かせるなど、何とか生活をしています。

アンマン近郊で、6歳、4歳、1歳の3人の子どものいるマルワンさん一家を訪問しました。アパートで暮らしていましたが、手持ちのお金が底をつき人の家の物置で暮らすようになったそうです。支援を受けてはいますが、生活をするには全然足りません。

© Jordan National Red Crescent

© Jordan National Red Crescent

問い掛けを続けていると、次第に強い口調で、子どもたちを学校に行かせることもできない。妻は次の子を妊娠していて、すでに7ヶ月になるが検診を受けたこともないと、興奮のあまり写真の通り、インタビューは中断してしまいました。事前にインタビューがあるとお知らせをしていたにも関わらず、その不安や想いが溢れ出てしまったのです。相当切羽詰まっているのだと、ひしひしと感じました。

その時は、同行してくれた赤十字のカウンセラーの方が彼の相談に乗り、奥さんは国のサービスで検診を無料で受けられること、仕事や収入については赤十字が相談に乗れると伝え、その場はどうにか収まりました。経済的な不安定さと、そしていつまでこの状態が続き、これからどうなるのかと先の見えない不安が非常に大きな精神的なストレスとなっています。皆さんヨルダンに来て、生活は安全なものになったと感謝しつつ、でも故郷に戻りたい。いつ戻れるかは分からないという想いを持ち続けています。

私はこのように1軒1軒家を回って家庭毎にカウンセリングをしていることも、現地に行くまで知りませんでした。人々が受けた傷を癒すにはその傷を受けた何倍もの時間とより多くの方のサポートが必要です。今後も心のケアのニーズは、より一層重要になってくると思います。

© Jordan National Red Crescent

© Jordan National Red Crescent

© Jordan National Red Crescent

ヨルダンから戻り、私たちは本当に恵まれているんだと改めて感じました。これまでは、ニュースを見ていてきっと大変なんだろうとは思っていたものの、どこか遠い世界で起きている他人事のように感じていました。しかし、実際にヨルダンで直接難民の方々と出会い、お話を伺い、一人ひとりが抱えている様々な苦しみを知りました。そして、それは日に日に大きく深くなっています。是非、もっと多くの方に知ってもらわなければと、今はそのように思っています。そして、私たちが今できることを、小さな一歩から一緒に始めていきましょう。私が今回見てきたことを、是非日本にいる皆さんに、そして今、目の前にいる皆さんに、特に私と同じような若い世代の方に知ってもらえたら嬉しいと思っています。本日は、ありがとうございました。

宮　崎:ありがとうございます。森田さん、如何ですか。やはり若い世代の方たちが、現地で自分で見て、聞いて考える大切さというのを、今のレポートなどを伺うと改めて感じます。

森　田:そうですね。やはり知ることが出発点になるのだと思います。知る勇気、そして今度は知ったことに対して自分自身がどう向き合うのか。恐らく知ることによって世界の見え方、あるいは社会の捉え方というのが、少し、あるいは大きく変わっていく。その時は怖いし、目を背けたり、背中を向けたりしたくなってしまうかもしれません。しかし、それに対して正面から向き合っていく。例えば、先程のモヤモヤ感、心の痛み、恐らく中沢さんもお感じになったと思うのですが、そこを出発点として、負として、ネガティブにとらえるのではなく、今のご発言にもあったように、ポジティブなこれからの行動に結びつけていくエネルギーに転換することができるのが若い人の特権だと思います。

宮　崎:田中さんもご意見がありますでしょうか。

田　中:中沢さんのお話にあったように、難民の人たちは大変です。特に仕事が見つからないと、将来に対して不安になります。ただ、私ども日本人からすると、難民という言葉に「難しい」という字が入っているので、何か難しい人たちなのかと錯覚するかもしれません。けれども、皆普通の人なのです。

JICAの理事長だった時、ヨルダンのザータリキャンプに行きました。そのザータリの難民キャンプで、青年海外協力隊の日本人の若い職員が、今写真に出ていたような小さい子どもたちの体育や音楽の授業を行い、一緒に楽しんでいました。難民といっても特別な人たちではなくて、大変苦しいけれども、皆一所懸命に生きようと思っている人たち、私たちも共感できる人たちだと思っていただければと思います。

宮　崎:ありがとうございます。中沢さんは、今のお話の「知る」というところまでたどり着きました。それを受けて、今度はどうするか、どのような行動を起こすかというところにいらっしゃるのではないかと思いますが、抱負はありますか。

中　沢:現在、医療の勉強をしていますし、ミス・ユニバース・ジャパンとしての活動もさせていただいていますので、より多くの方に気持ちを共有して、より多くの行動を一緒にできたらと、そのように思っています。そして、今後も発信することを続けていきたいです。今回のように、直接伝えるような機会があれば、その時にはまた気持ちを共有できるような空間を作っていきたいと思っています。

宮　崎:ありがとうございます。頑張ってください。どうぞ皆さん、中沢さんを温かい拍手でお送り下さい。

③今求められる人道支援とは？

宮　崎:まず「知る」こと。今は情報時代ですから様々な情報が、実はネット上なども含めて飛び交っています。何をどうするかと言った時に、実は宝の山に行って宝を見ないで帰ってくるような場面ということが、結構あるのではないかと思います。安田さんは、そのまず「知る」という部分について、どのような心構えで臨んでいらっしゃいますか。

安　田:今まで様々な取材をさせていただいて、それを皆さんにお伝えするという仕事を続けてきましたが、それは聞いてくれた方の「心の種」を増やしていくような作業だと思うのです。例えば、私自身も写真によって皆さんに様々なことをお見せしていく中で、今すぐ支援をしてください、今すぐ現地に行ってくださいと言うことできるわけではありません。もしもそこにつながったらそれに越したことはないのですが、誰しもがすぐに行動ができるわけではないですし、もしかすると森田さんがおっしゃっていらしたように、無力感がどんどん積もっていくかもしれない。でも、その「心の種」があることによって、例えば、こういうスタディツアーがある、こういう募金の機会があるということを見た時、何も知らないゼロの状態だと、自分の行動の触手って動いていかないかもしれません。でも、ゼロが1になっていることによって、この前見た写真に写っていたことだと、それに対して2にも3にも、それ以上になっていく可能性ってあると思います。ですので、「心の種」を増やしていくということは、「行動の花」を咲かす可能性を増やしていくということでもあるのではないかと思っています。

宮　崎:ありがとうございます。また、その人たちが置かれている状況について知るということと同時に、背景の文化やライフスタイル、色々な価値観、考え方、これも同時に知らないと、近衛さんがおっしゃったように、エボラ出血熱から救おうと思っているのに、地元の風習とこれが抵触してしまう。文化と支援のあり方との関わりあいということを、近衛さん、どう考えていけばよろしいのでしょう。

近　衛:とかく人道支援と言うと、恵まれた先進国の人たちができるお手伝いをするという図式だったと思います。けれども、最近やはりその被災者の立場に立って、あるいは、被災者の視点から救援をすべきじゃないか。むしろ、主役は支援をされる側の人たちである、という理解が進んできているように思います。

例えば、皆さんがおっしゃったまず知ることから始めなければ何も始まらないということに、私も全く同感です。何をどのように知って文化を含めた色々な背景の違いも踏まえて理解しなければいけないということだと思います。

現実には、言葉は良くないかもしれませんが、同情の質と量に非常にムラがあるような気がします。

例えば今年ネパールで大きな地震がありました。この時に私どもに救援金がどんどん寄せられ、16億円ほど集まりました（最終的には2015年で20億2400万円以上）。 かたや、中東でこれだけ大きな人道的危機を迎えているのに救援金はほとんどゼロに近かった（中東は2015年1年で5000万円弱、2012年から2016年10月3日までで1億2485万円）。ということは、中東に対する関心、知る機会がないということもあったのかもしれませんが、なぜかその紛争の犠牲者、あるいは難民、国内避難民、そういう人たちには同情が集まらない、あるいは集まりにくい。これは最近に始まったことではありませんけれども、そういう傾向があるように思います。

ですから、少なくともシリアの情勢については、かなり詳しい情報が提供されていると思いますけれども、それでも非常に同情の偏りということがある。その理由がなかなか分からなくて、色々と皆さん方からもご意見を伺いたいと思います。知らなければ始まらない。その上で考え、行動に移していく。知ることは、こういう情報がいくらでもある時代ですから、アクセスしようと思えばできる。しかし、そこに関心のあることだけを知ろうと偏ってしまっているのではないかと、そんな印象を持っています。

宮　崎:それは、どういうところに原因があるのか、森田さんはどのように分析されますか。

森　田:そうですね。何か世界的に大きな潮流があって、例えば、冒頭で宮崎さんからもトランプ大統領が誕生したというお話がありました。そのトランプさん自身は、ざっくり言うと孤立主義的、保守主義。アメリカ・ファースト。極論すると、自国が一番大事だということだと思うのです。

宮　崎:アメリカ・ファーストって、美しく訳すと第一主義ですが、アメリカのことだけを考えるというような意味で使っていらっしゃいますよね。

森　田:そうですね。他にも今年、イギリスのEU離脱という話もありました。さらにはイギリスの国内では、スコットランド独立の議論というようなことがあって、世界全体が少し分断化あるいは流動化していっている。その背景には20世紀に、ある種人工的に作られた国民国家という枠組み。例えばソ連とかユーゴスラビアが代表的なものだと思いますが、そう

いうものが21世紀を待たずにして崩れていった。すなわち国民国家は、我々のアイデンティティはソ連国民です、○○国民ですというアイデンティティの下にしばっていたことによって、先程近衛さんがおっしゃった自助、共助、公助が、ある程度その中で生まれていた。ところが、その国民という共同幻想が解けていくと、民族や部族、あるいは宗教・宗派の違いのような、元々人々の心の中にあった、我々はイスラム教徒だ、我々はスンニ派だ、○○部族だというものが前面的に出てきた。そうすると、例えばイラクなどでも、かつてはシーア派とスンニ派とクルド人が1つのコミュニティの中で一緒に住んで、違いはあるけれどもコミュニティを維持して共助が成り立っていたものが、イラク紛争によってそれがバラバラになってしまって、同じコミュニティの中に敵ができてしまった。そうして、自助、共助、公助の部分の自助しかなくなり、共助も公助もなくなったということになっているのだと思います。

そうすると、今度は国民国家をベースとした国際機関も解決できないような問題がどんどん出てくる。クルド人にとっての、クルド人アイデンティティみたいなものが、イラク国民とかシリア国民の前に出てくる。この我々意識というものが、どんどん小さい単位になっていくことによって、近衛さんがおっしゃられたような問題も出てきているのではないかと思います。

宮　崎:田中さん、如何ですか。

田　中:シリアの問題のことで言いますと、シリアは、世界の中で最貧困国ではありません。世界にはもっともっとずっと貧しい国があります。

宮　崎:LDC（後発開発途上国）やLLDC（内陸開発途上国）と呼ばれている国ですね。

田　中:それにも関わらず、シリアでこれだけの内戦が起きてしまった。内戦が起きたことによって、元々特に貧しかったわけでもない人たちが、皆難民になった。こういう境遇に置かれた人たちに対して、私たちはどう向き合うべきか。

近衛さんがおっしゃったように、とりわけ私たちの社会では関心が薄い、これは事実です。もちろん、こういう難民を生み出してしまった責任も、そのシリア国民にあるのかもしれないけれども、やはりこれは国際政治、その他の状況によって不幸にして戦争が起きてしまったということがある。

これに対しては、やはり私どもも何とかできないのかと思う。先程、中沢さんがおっしゃったように、想像力を働かせて、知ることによって何ができるのかを考える。ヨルダン、レバノン、トルコ、この辺はその避難民の方たちを皆受け入れて、そこに住んでいる人たちの授業を半分にしなければならない。そうすると、日本、あるいは日本人として、少なくとも周辺国のそういうホストコミュニティが困らないようにできる限りのことをするというくらいまでは助けなければいけないと思うのが、人情ではないかと私は思います。

宮　崎:人情……最終的にすがれるのはそういうところなのでしょうか。ただ、歴史的、伝統的に、例えば階級社会がまだ残っている地域であるとか、あるいは公平公正と言うけれども、その概念そのものが私たちの考えるものとまた違う地域などもあるかと思いますが、如何でしょうか。

田　中:少し追加いたしますと、紛争によって色々と困っている社会を根本的に良くしていくためには、様々なことが必要です。文化を理解することも大事だし、もしかすると文化を変えなければいけないかもしれない。部族対立を変えなければいけないかもしれない。こういうものは沢山あります。ただ、その根本原因を解決しなければ、何もできないかと言うとそんなことはなくて、現に今、苦しんでいる人たちが一杯いて、その苦しんでいる人たちに何ができるかというのが人道支援なのです。

ただ、人道支援だけでは根本的な解決にはつながらないかもしれないので、人道支援とその後の社会再建。社会をもう一回復興していくというプロセス。それから経済発展。こういうものが長期的につながっていかなければいけないと思

います。ですから、長期的につなげていくことを視野に置いた上で、しかし現に今、苦しんでいる人たちへ支援の手を差し伸べなければならないというのが、まさに赤十字が生まれた背景なんだと思います。

宮　崎:まさに、そうですね。しかし、その人道支援を行っていく時の現実の厳しさということもあると思います。そのような1つのニュースを皆さんにご覧いただきたいと思います。

9月にシリアで人道支援車両が空爆を受けた時の「赤十字ニュース」の記事です。シリア赤新月社のボランティアスタッフが犠牲になりました。シリアだけで考えても、赤新月社のボランティアスタッフが50人を超えて犠牲者が出ているということであり、狙っての攻撃ということもあるのでしょうか。このような難しさ、厳しさについて、どう見つめていったらよいか、この辺のお話を伺いたいと思います。安田さんは、現場で危険な目に遭ったということはありますでしょうか。

安　田:私自身は危険な目に遭ったということは、今のところありません。けれども、皆さんもイラクのニュースを度々耳にされてきたと思います。特に、最近はイラク第二の都市と言われていた北部にあるモスルという街が、2014年にみなさんもご存知の通り、IS、いわゆるイスラム国と呼ばれているグループに占拠されてしまった。それは非常に大きなことだったと言われています。今、その第二の都市、モスルを奪還しようという作戦がずっと続いているのですが、実は私自身、3カ月前の9月にそのISからイラク軍が奪還したという村々を訪れました。

まずそこは、昼でも空が真っ暗です。これは、なぜだろうと見てみると、重要な資源である石油を減らす目的で、ISの兵士が逃走する前に油田に火を点けてしまい、以来3カ月間ずっと燃え続けていて、村が真っ黒な黒煙に覆われている。一方、住人の人たちはどうしているのかと言うと、一時的に学校のような施設に集められて避難生活を送っていました。避難をしているというよりも隔離をされているという状況に近かった。それはどうしてかと言うと、攻めて来たイラク政府軍としては、その人たちがISに加担していた人たちなのか、兵士だったのか、それ以外の住人だったのか、全く見分けがつかなくなっている。そこで、長い時間をかけて、どこの生まれなのか、何をしていたかをインタビューして篩にかけていくという作業を続けていきます。

その間、自由に出入りができないので、例えば、怪我をしていたり病気になったりした人たちが、どんどん弱ってしまい、やっとそこから出て難民キャンプに移れた時にはもう手遅れになっていたということや、何とか人道支援をしたいけれども、治安的にあるいはそういった紛争地だからこその難しい壁があり、そこに支援が及ばないという葛藤が現場には沢山あるようです。

宮　崎:近衛さん、如何ですか。

近　衛:紛争下では、戦闘状態にあっても守らなければならない最低限の人道的なルールを定めたジュネーブ条約、いわゆる国際人道法というのがあります。これは、世界中のほとんどの国が賛同していて、当然、守られなければならない

ルールのはずです。紛争の当事者、戦闘をしている人たち、また中立の立場で人道支援に関わっている人たち、あるいは医療施設は攻撃の対象にしてはいけないというルールです。それが現実には守られていない。

例えばシリアで言えば、政府が掌握している地域と掌握できていない地域がある。当然、反政府側の方には政府側は援助することを好まない。しかし、実際には人道的なニーズがあるわけですから、そこを色々と場所を絞り、それぞれの当事者と話し合いをしながら、やれるところを少しでもやっていこうと様々な苦労をしているわけです。

政府がコントロールしている地域としていない地域。政府がコントロールしていない地域には国境越えで支援をしなければいけないということもあるわけです。これも国家主権の関係からなかなかシリア政府が許可を出さない。しかし、それでもその時々の状況によって、少しでもアクセスができるように努力をしながらやっているわけです。

シリア赤新月社の社長が言っていましたが、世間では単純にシーア派とかスンニ派、政府、反政府というような分け方をするけれども、実際には500くらいのそれぞれ様々なアイデンティティを持ったコミュニティがある。ただ、今まではそれでも平和共存をしてきたわけです。ある日突然、戦争を始めたわけでもないですから、あっちの部落には、好きか嫌いかは別としてもこういう人たちが住んでいるというように、お互いに顔はつながっている。そういう状況で、その時々に応じて、いかにアクセスを確保するかということが一番の課題になっています。

単純に外から入って、物を配ろうとしてもできる話ではない。それぞれのグループも、状況によって政府側についたり反対側についたり、違うグループについたりする。非常に流動的な情勢ですから、それに柔軟に対応できるという仕組みがなければ、援助を実施することは難しいのです。

宮　崎:中立だ、公平だと言っても、結局、その発生の背景などを考えると、政治的な枠組みや力というのを全く排除して考える、行動するということが難しい。敵も味方も救うと言っても、外から現地に入るだけではなかなかそう簡単ではないということをどう克服するかは、難しい問題だと思います。森田さんは、何かその辺でお考えはありますか。

森　田:先程、我々意識というお話をさせていただきました。また、これも先程近衛さんから、同情の質と量というお話があったと思います。例えば、我々は地震国ですし津波も経験していますので、他国で地震の被害、津波の被害があると、同じような災害で被害に遭って困っている人たちだと、共通感やあるいは親近感、親近感と言ったら語弊があるかもしれませんが、共感できるし、さらにその被害がどのように恐ろしいものかも想像できる。

ところが紛争となると、幸いなことに日本では先の大戦が終わって以降70年以上にわたって、戦争も内戦も経験していない。なので、紛争に巻き込まれている国というのは、我々とは違う人たちなんだと、我々意識を持てない、あるいは薄い。そういう、違う人たちだという認識が問題を複雑化している。

例えば左手を怪我したら、右手でさすったり治療したりする。その時に、右手は左手に感謝しろとか、あるいは自業自得だとかは言わない。もし人類が、我々という意識であれば、傷ついたところはさするし、手当てもする。場合によっては手術もする。しかし一方で、近衛さんからレジリエンスのお話がありましたが、最終的に我々の手の怪我が治るのは、右手が治すのではなくて左手のレジリエンスで、自己再生、自己回復、自己治癒のような力が治していくわけです。だから、先程田中さんがおっしゃったような自己再生、自己治癒というのは、時間を掛けて治っていくけれども、今、怪我をして血が流れていたら、左手は自分で治しようがないのだから手当てをしてあげなければいけない。そして、それと共に、左手が自己再生できるような時間を作ってあげなければいけないということだと思います。ただ、右手が左手に対して、我々意識を感じていないと自業自得、ざまあみろというような、場合によってはそうなり兼ねないというのが問題の根本にあるような気がします。

宮　崎:いかに自分のこととしてとらえるかというのは、言うほど簡単ではないというお話ではないかと思いますが、実は会場にもうひと方、ご紹介したい方がいらっしゃいます。

ラガド・アドリさんです。2011年、日本に留学中、東日本大震災を経験されました。その後シリアに帰りまして、シリア

赤新月社のもとでボランティアスタッフをされました。救急車に乗って現場へ駆けつけるというような活動もされていた方です。どのような思いでそういう活動に携われていらしたのかを少しお聞きしたいと思います。ラガド・アドリさんです。ようこそお越しくださいました。

アドリ:ありがとうございます。初めまして、ラガド・アドリと申します。2011年に日本の千葉大学へ1年間の留学をしていた時、東日本大震災が起きました。その時、自分は日本人ではないけれども、困っている人がいるならばと、東大生のチームに入って気仙沼に行き、片付けのボランティア活動をしてきました。世界は1つ、人間も1つと思ったからです。1年経ってシリアに戻った時、ちょうど内戦が始まったのです。日本に来る前のシリアと、帰った後のシリアは全然違う国でした。自分の生活や将来ではなくて、他人、つまり周りの人たちを助けたい、何かやらなくてはと、色々なこと、色々なボランティア活動をやりましたが、結局シリア赤新月社、つまりシリアの赤十字社のボランティアスタッフになりました。

3年間ほどボランティア活動を行って思ったことは、自分にもできることがあるということです。私だけでなく、誰でもできることがあります。私が日本に留学する前はシリアは平和な国で、全く問題もありませんでした。しかし、そうなった時に私にもできることがありました。

また、皆さんがおっしゃっていたように、知ることが一番大事だと思います。自分が大丈夫だったらよいということではなく、まず知って、その次に私は何ができるという考え方です。皆さんが今日ここに来たということをきっかけにして、自分の生活だけでなく、他の人のために何かできるということを考えてほしいと思います。つまり、自分の周りの人たち、他人の気持ちを想うところから始めて、世界の色々な国に何が起こっているかを知ろうとしてください。例えばシリアという国をこの戦争が始まる前に知っていた人はそんなに多くないと思います。今はシリアというと戦争の国のイメージですが、シリアはそういう国ではないと、いつも周りの友達などに伝えています。

今、シリアや他の人のために何かできることがないかずっと考えています。人間としてやるべきことがあると思います。国籍に関係なく、時間があるかないかではなく、やらなければならないことが一杯あるはずです。そしてそれは1つではないので、皆さんがそれぞれ自分のできること、どんなことかは自分で探して、小さなことでも大丈夫です。皆さんが世界のため、自分の周りの人たちのため、自分のためにも何かやらなければならないと思ってやった方がよいと思います。その小さいメッセージをここにいる皆さんにお伝えしたいです。

宮　崎:ラガドさん、ありがとうございます。

まさに地球市民としていかに生きるかということをしっかりと自覚していらっしゃるのではないかと、しかもそれを日本語で発信してくださるようなグローバルな人材がここにいらっしゃるということだけでも、私は大変感動します。田中さん、如何でしょう。

田　中:幸いなことに、今、日本社会には大変多くの留学生の方がいらっしゃっていて、日本人と一緒に学んでいます。その面で言えば、日本にいても留学生の皆さんと積極的に交流することで、世界でどういうことが問題になっているのかを理解することが、以前よりもずっと容易になっていると思います。

少し話題は変わりますが、今の話のように紛争地帯で行なう人道支援というのは大変難しいです。敵対しているそれぞれにどうやって入っていくか、支援に行っても支援に行った人間が撃たれて殺されてしまうかもしれない。これは大変なことです。それに比べると、大地震や台風、また感染症などは、銃を向けられることはそんなに多くないでしょう。それでも、やはりそういう面での人道支援も結構大変です。これは本当に、些末なように見えるけれど切実なのです。

例えば、2015年にネパールで大地震がありました。その時、日本政府はただちに緊急援助隊を派遣すると決めて、事務局のJICAが、日本全国からすぐに行けるレスキュー隊の人たちに集まっていただき成田から飛んでもらいました。ですが、カトマンズ空港が一杯で降りられない。上空まで行って降りられないのでカルカッタに戻り、今度は飛べそうだとまた行くけれど、また降りられない。結局、日本の緊急援助隊がカトマンズに着いたのは、大地震の時に生存者を助けられ

るぎりぎりと言われる発生から72時間の直前に、ようやくたどり着けたということです。ですから、飛行場に降りられないということだけで、そういう事態になることもあります。

それから、近衛さんがおっしゃっていたような、西アフリカのリベリアやシエラレオネ、ギニアにおけるエボラ出血熱が発生した時、私どももやはり緊急援助隊の派遣ということを考えました。けれども、今まで日本の緊急援助隊は、ほとんどが大地震、台風などに備えていて、医療チームで集まっていただいている先生方は、怪我などの応急対応をする先生や看護師さんなのです。感染症という話になると、エボラ出血熱が蔓延しているかもしれないところに派遣できる体制が我が国にはできていませんでした。現在は、一生懸命に感染症専門の先生方に話し合っていただいて、そういう対応ができるように努力しています。人道支援を行う場合、一番難しいのは多分紛争地域だと思いますけれども、そうでない場合でも、結構プラクティカルな、飛行機着陸もままならないということやその他のなかなか難しい問題があるということも申し上げておきたいと思います。

宮　崎:手前のところから計算していかないといけないというわけですね。安田さんはそういう思いをされたことはありますか。

安　田:私ごとにはなりますが、東日本大震災の時、義理の父、母が岩手県陸前高田市に暮らしていて被災をしました。そのようなきっかけもあり、今も通い続けています。実は今日もこのあとに行くことになっています。この東日本大震災の時、情報の寸断ということがあり、例えば支援物資の偏りがありました。こちらの避難所にはこんなに沢山物資があるのに、こちらにはほとんどないという偏り、それはやはり情報を得る手段が寸断されてしまったことで非常に難しかったと思います。

先程、震災当時のお話もいただきましたけれども、改めてあの当時、温かいご支援をいただけたことのお礼をまずお伝えしたいと思います。本当にありがとうございました。

先程の話に少しつながってくるのですが、東日本大震災の時に私たちが特に感じたのは、もちろん支援の難しさということもあるのですけれども、人道支援って何々をしてあげるではなくて、お返しの仕合いなんだということでした。震災直後に避難所へお邪魔した時、おばあちゃんにトントンと呼び止められて、「あなたたち、カメラマンとしてよく海外に行くんでしょ?外国のことを教えてちょうだい」と言われました。外は本当に瓦礫だらけで、食べ物もぎりぎりかもしれないという時ですから、「どうして?」と問うと、自分たちは今までニュースを見ていても、海外の紛争あるいは災害もどこか他人事だった。でも自分たちが家を流されてみて、初めてそういう人たちの気持ちが少し分かった気がするのとおっしゃったのです。

その後仮設住宅で、自治会長さんが呼びかけてくださって、シリアの子どもたちが冬越えできますようにと、余っている物資やお子さん、お孫さんが大きくなって使わなくなった服を集めてくださいました。これは自分たちが世界中から支援をいただいたので「恩返し」というよりも「恩送り」をしたいということでした。先程森田さんがおっしゃったように、ウワッという紛争の熾烈な戦火は目の当たりにしていないかもしれない。ただ私たちはある日突然、故郷が失われてしまったという、その痛みは目の当たりにしてきている世代だと思います。そして、想像力という大きな力が私たちには残されていますし、それを少しずつ少しずつ外へと向けていって、先程田中さんがおっしゃっていたように、すぐに内戦を止める力にはならないかもしれないけど、傷ついて逃れてくる人たちを支える力にはなるのかもしれないと、災害の時に改めて感じました。

宮　崎:ありがとうございます。

もう1つ、よかれと思って一生懸命尽くして行動していることがなかなか伝わらないということもあるかと思います。例えばイラクで瓦礫の下から生存者を見つけるために、アメリカが救助犬を派遣して、犬のすぐれた嗅覚で埋まっている人を見つけようとした。ところが、このことはイラクの方にとっては、宗教上の理由など色々あって、失礼な行為だと受け取られてしまうということもあるようです。こういったことについては、森田さん、如何でしょうか。

森　田:先程、国民国家がある種ほどけていって、民族とか部族、あるいは宗教とか、そういうものがアイデンティティとして出てくる中で、なかなか相互理解が難しくなっている。例えばかつて同じコミュニティに住んでいた、シーア派、スンニ派、クルド人が突然一緒には住めなくなるみたいなことが起こってくる。そうなった時に、文化や習慣の違い、価値観の違いをどう理解するのかが非常に重要になってくると思います。

ところが一方で、そこで重要なのは、どこまで理解して認め合うのか、例えば女性には教育を受けさせない、あるいは極端な例でいうと、異教徒は殺してもかまわないみたいな文化とか価値観を持っている時に、ではそこまで認めてしまうのかということになる。そうすると、我々はどこまで多様性を尊重し合い、どの部分は譲れないものとして持ち合うのかということがないと、結局は皆が小さな我々意識の中に閉じこもってしまって、よく知った人々の中で暮らしていけばよい、その中の生活さえ保たれていれば、それ以外の外側の生活はどうでもよいということになると思うのです。

そういう意味では、どの部分を人類共通の価値観として共有して、ここは譲れないが、でもその上に存在する多様な価値や文化などを認め合うかを考えるためには、まず知ってそして理解して、そして同調はできなくても共感はして、そして尊重し合う。そのためには、冒頭に申し上げた我々意識がどんどん小さくなっているようなことと、どう戦っていくのかという気がします。

宮　崎:やはりコミュニケーションでしょうか。グローバルな相互理解をいかに進めていくかということがどうも鍵を握っているように思います。その意味で、今年エポックメイキングなことがありました。5月にイスタンブールで開催された、世界人道サミット。

© OCHA／Metin Pala

今、その様子の写真が出ていますが、まさに世界中でこのことについて話し合おう、理解し合おうという機会がようやく持たれるようになったということではないかと思います。近衛さん、この世界人道サミットの意義をどのようにお考えでしょうか。

近　衛:世界人道サミットには、55か国のトップを含む173か国から約9000人が集まりました。ただ、先に申し上げたように、緊急救援と開発協力的なことを結びつけるのは必ずしもふさわしくない。緊急の課題が沢山ある時に、あまり長期の話をしても仕方ないのではないかという視点から、この会議に参加を見合わせたところもいくつかありました。ただ、これだけ多くの政府、国際機関が集まって共通の人道課題を議論したというのは、恐らく歴史上あまりないと思います。そういった意味では、この開催自体がかなりエポックメイキングだということは間違いないと思います。

それから、かなり人道的な課題は共有されたということも言えると思います。具体的にどうするかということについては色々と議論が分かれましたが、ともかく現在すでにあるルール、これを守ろうではないかという考え方が結論に強く表れていたと思います。また、実際に援助をする上でもっと合理的な仕組み、あるいは新しい技術なども取り入れてもよいのではないかという、実質的な議論も随分されました。

ただ、一番力が注がれたのは、やはり国際社会が国際社会として動くだけではなく、それぞれの地域の危機に対する対応能力、そういうものを強化していかなければ仕方がないということです。例えば赤十字でいうと、緊急救援の時、国

際機関を通すと手数料、管理費みたいなものをかなり取られるのですが、そうすることで真水、真の支援の分が減ってしまう。

ですから、国際社会に善意が一杯あることは分かるのですが、その善意をどのように効果的に生かしていくか、そういうことでの色々な議論がされて、ある程度の合意が見られたと思います。ただし、それがどこまで実際に実施されるか、実現されるかとなると、これは様子を見てみないと分からない。ともかく、一生懸命やっていこうということだけは合意されました。

宮　崎:次に田中さんに伺いますが、この世界人道サミット、これは国際政治の観点から、例えば国際関係論の枠組みで分析した時、今この時期に人道サミットが行なわれるということの意義を、どのように考えられますか。

田　中:最近の国際政治、国際関係を新聞だけ見ていると、世の中がどんどん悪くなっていくんだなという感じがすると思われるのではないでしょうか。シリアの内戦は、なかなか終わりません。ロシアや中国のやっていることと、アメリカはなかなか仲よくならないし、アメリカやEUで起きていることも何か今までの動きと反対かと思うこともあります。

しかし、国際社会全体の状態を改善していこうという意欲の表れは、この2年間くらいでいくつか出てきています。それは昨年の9月に国連総会において全会一致で承認された持続可能な開発目標、2030アジェンダ、SDGと言いますが、世界全体の目標を定めることを決めました。それから、昨年の12月にはパリで気候変動に関するパリ協定というものができました。そして、今お話になったような人道問題に関しても、世界中の首脳が集まって人道問題に対処しましょうという世界人道サミットが開かれたというわけで、少なくとも意識の面でいうと、世界全体の共通問題を国際社会全体として解決していこうという機運は盛り上がっているし、そういう協定や文書もできつつあるのです。

ただ問題は、これをどうやって実施していくかといういつもの問題で、近衛さんがおっしゃっていたことに結構端的に出ています。これもやや現実的な話ですが、SDGは開発関係をやっている人たちが主にやっている。パリ協定というのは気候変動関連の人たちがやっている。それから世界人道サミットの中で極端に開発や他の議論を混ぜるなと言っている人たちは人道だけやっている。この3種類の部族というか、開発部族と気候変動部族と、それから人道部族は、結構仲が悪いのです。どちらかというと、自分のやっている問題が一番大事だと思っていますから、他のところが混ざると自分のところに来る資源が減るのではないかと思う。ですから、人道サミットで長期の開発問題を話しましょうというと、人道のほうではなくて開発のほうに金を使えということかという話になってしまう。開発の人からみると、人道、人道と言っているけれども、人道支援だけやっていても教育水準は上がらないでしょうという話をするわけです。現実にはこの三者をうまく協力させて最適解をどうやって作っていくかというのは、今後の世界全体の大きな課題だと思います。

宮　崎:なるほど、縦割りなんですね。そのあたりで誰かがうまくリーダーシップを発揮できるような国際社会のあり方を望みたいですが、その中でもやはり私たち一人ひとりがどうとらえるかというのが一番の基本の問題かもしれません。

④会場の声

宮　崎:ここで最初にお約束いたしましたように、会場の皆さまとやりとりをする時間を少し設けさせていただきます。まずご意見、ご質問を伺う前に、皆さまに挙手で、お考えを伺ってみたいと思います。

この人道支援の問題は、他人事ではなくて自分の問題だと考えているという方はどれくらいいらっしゃいますか。今日の話を聞いてそう思ったという方でも結構です。どうぞ、そのまま挙げ続けてください。多くの方が挙げてくださっています。

ではその手が挙がっている方々の中で、例えば難民の方が命からがらいらしたら、自分の家に泊まってもらってもよいと思う方、どれくらいいらっしゃいますか。

ありがとうございます。やはり手が下がる方が多いでしょうか。この辺のところが、1つの課題かもしれません。森田さん、何かコメントはありますか。

森　田:私も正直戸惑う質問だと思います。先程田中さんがおっしゃられたように、今起こっていることに緊急に対応しなければいけない部分、それともう1つ、やはり長期的に行うということがあったと思いますが、人道支援というのは普通の市民にとっては関係のないことで、特殊な人がやってくだされば いいんだ、あるいは自分は税金を払って平和に暮らしていれば、それで責任を果たしていることになると思ってしまうと、どんどん我々意識が小さくなって、小さな自分の生活圏の中では特に支障がないからよいではないかということになると思うのです。そこを変えていくことができるのは、やはり若い人の力、それと少し上から目線になりますけど、教育の力なんだと思います。教育と学びがそのあたりを変えていくことができるのではないのかと思います。

だから、難民の人が突然来られたら泊められるかというと、それは経験したこともないし、どういうことになるのかも分からないという意味では少し戸惑いがあると思います。ただ、そういうものがもし仕組みとしてある、あるいは実例が身のまわりにあれば、市民としてそれについてはということになるのかもしれない。そうするとやはり現時点で足りないのは、知識と理解の問題だと思います。

宮　崎:はい。今日、手を挙げてくださっている方々は、皆さん本当に正直で率直におっしゃってくださっていると思います。

では、次にご意見、ご質問のある方、どうぞお手をお挙げください。ご意見がなければこちらから当てさせていただくことになります。

今日は実は森田さんのゼミ生もいらしているということなので、森田さん、学生のどなたかをあててもらえますか。

森　田:では少し、前置きとして説明させていただきますと、冒頭に申し上げたように、現在、私は赤十字パートナーシップ講座というのを担当していまして、15回にわたって人道、人権、あるいは非営利の世界の現場で、困難な現実に直面している方をお招きして授業を行なっています。明治学院大学の経済学部経営学科の学生たちは、当然そういう人道問題とか社会福祉に関心があるということではなく、ビジネスに関心があってきている学生です。そういう学生たちが15回の授業を経る中で、どういうことを学び、そしてどういうことに気づき、感じ、そして受講する前と後で何が変わったのかということを皆さん方にお聞きいただくことが、先程私が申し上げた長い目で見たら教育や学びの力がこういう人道支援問題には重要なんだということの1つのヒントになるのかもしれないと思います。その赤十字パートナーシップ講座を受講した中で、今、発言してみてもよいという人はいますか。はい、野嶋さん、起立。

宮　崎:では、野嶋さん、お願いします。

発言者・野嶋:明治学院大学経済学部経営学科に所属している野嶋香織と申します。授業を受けてみて、本当に自分だけの情報では知り得ない色々な世界を知りました。子どもを産むことが大変というくらい衛生的に整っていない国や、子どもが兵士として出ていかなくてはならない、家族1人殺せるくらいでないと兵士にはなれないぞと言われてしまう子どもが世界にいることを知りました。自分が、世界的に見れば、すごく恵まれている環境にいるのだということをとても実感しました。普段生活していて、もっとお金があったらとか、もっと大きな家に住みたいとか、そんなことの上を目指してしまう自分がいたのですが、世界的に見ると学校に通えて、ただいまと言えばおかえりと言ってくれる家族がいて、すごく幸せで恵まれているのだと感じるようになりました。

ただ、最初に森田先生がお話しされたように、では、今自分は何ができるのか、私が世界に行くこともできないし、言語も話せないしとなると、本当に何ができるのだろう。知ってしまったけれど、何か手助けしたいけれど何もできないというモヤモヤ感が毎回の授業で積み重なっていきました。先生も最初にお話されたように、私はすごく注射が嫌いで、献血な

んて考えるだけで引いてしまうような感じだったのですが、授業の中で学ぶ機会があり、どのように届けられて使われているのかを知り、自分でも誰かを助けることができるんだということを学びました。それからは注射は苦手でも、何かしてあげたいという心の種をもらったというか、一歩踏み出す勇気をもらって、学校に来る献血車で献血をするようになりました。

宮　崎:ありがとうございました。できるところからできることを始めていこうという、よいお話ですね。他にどなたかいらっしゃいますか?今、手のあがった方お願いいたします。

質問者・辻:辻と申します。今、皆さんのお話を聞いていて、皆さん4人の方々が小さな我々意識から抜け出したきっかけとなった出来事はどのようなことだったのかをお聞きかせ頂けますでしょうか。また、今は情報社会になって、情報だけはすごく恵まれていると思います。情報ばかり調べていたら頭でっかちになって、一方、実体験ばかりしていると体感的というか、大きな視野で見られないと思うのですけど、そのバランス感覚をどのように保っていらっしゃるかをお聞きしたいです。

宮　崎:よい質問をありがとうございます。まず、我々意識というお話がありましたけれども、小さく凝り固まった我々から逸脱できる瞬間、あるいは地球全体が視野に入るようになったきっかけなど、皆さんの参考になるようなお話をお願いいたします。田中先生から順にひと言頂けますでしょうか。

田　中:振り返ってみてもあまりよく分からないのですが、高校生の頃に明石康さんの『国際連合』という岩波新書を読みまして、こうやって国際社会のために働いている人がいるのだと感心した思いがあります。大人になってからは明石康さんとも頻繁にお目にかかるようになって、お人柄にふれることができました。

日本の中にいても、本やあるいは今日のシンポジウムに参加するというようなことでも何か感じていただけるとよいかと思います。ただ、世界的な人道活動にしても開発活動にしても、全ての人がこれをやらなければいけないなんていうことはありえないと思います。普通の人は皆普通の人として、自分の人生があるわけですから、自分の人生設計の中で、人道活動や開発活動などに関わっている人たちに対して十分理解を持ってもらうということだけでも、大変ありがたいことだと思います。その上で少しお金に余裕ができたら赤十字に寄付するなり、JICAに寄付するなり、色々な団体に寄付するなりということをしていただいてもよいと思います。日本政府もかなり国際的な人道活動にお金を拠出しています。ですので、私どもが税金を払うことで、そこにも出しているということになります。日本政府がそういうことにお金を拠出するのは無駄だからやめろ、というようなことを言わないでいただけるとありがたいと思います。

宮　崎:ありがとうございます。では、森田さんお願いいたします。

森　田:はい。私自身も一番大事なのは、自分の生命と健康、そして尊厳です。さらに身近な家族、さらにその周りに広がっている友人、知人たち。そういう意味で利己心が排他的であるかというとそうではないと、ある種気づいた瞬間がありました。

宣伝ではありませんが、私どもの大学教育理念は、ドゥ・フォー・アザーズ(Do　for　others)、他者への貢献というものです。アザーズとは、自分たちと他の人たちということだと思いますが、正直に申し上げると、実は私はこのアザーズという言葉があまり好きではありません。先程お話した我々意識ということで言うならば、当然自分が最も大事、自分の家族が大事、ただその同心円をどんどん広げていったところに、グラデーションで薄くはなっていくけれども、皆我々ではないかと考えていく。自分自身は大事にしつつも、その大きな輪の中で考えていった時に、世界市民としての視点を持つことができれば、少なくともその人たちに無関心ではいられないし、あるいは敵とみなすこともできないだろうと思います。

宮　崎:そのことを気づいたきっかけは何かありますか。田中さんは本を読んだところから始まったということです。

森　田:きっかけと言いますか少しずつそうなり始めたのは、自分がインスタグラムをやっていて、そこに愛犬の写真をアップすると、ブラジル人からコメントがついたりします。地球の裏側の人から、あなたの犬かわいいねと。それに対して私もありがとう、あなたの犬もかわいいねみたいなことをやり始めると、同心円が地理的な距離というよりもお互いに親近感が持てる同じ人間だというような形で広がる。

従来20世紀までのマスコミを通じてしかほとんど情報が手に入らない時代から、こういう情報化社会でSNSなどでつながり始める。それまでは、グラデーションの薄かったところにも、濃い関係ができてくることによって、世界市民というのが絵空事ではなく、ブラジルにも私と同じ犬を愛している人がいるみたいと、徐々に実感が深まっていったような気がします。

宮　崎:では次に、安田さんお願いします。

安　田:ご質問ありがとうございます。私は高校2年生、16歳の時に、NGOからの派遣でカンボジアに取材に行かせていただいたことがきっかけです。それまで国際協力や人助けに燃えている高校生だったかといえばそうではありません。とても私的な話になってしまいますが、中学生の時に父、兄が相次いで亡くなったということがあって、それ以来、家族って何だろうということが自分自身の長いテーマでした。全く違う環境で生活をしている同世代の子たちは、どういう家族観を持って、どのような価値観を持って生きているのかということが気になって、自分のモヤモヤを解決したいという、本当に自分本位な気持ちで最初は行きました。

トラフィックト・チルドレン(Trafficked　Children)という言葉をご存知ですか。訳すと、売り買いをされた、人身売買の被害にあった子どもたちのことを指します。カンボジアで、そこから保護された同世代の子たちと一緒に時間を過ごしてから、それまではどこか遠くの国の何か大変そうなものというものすごく遠かった問題が、一気に自分の友達が抱えている問題となりました。そうなると、義務感ではなく、友達が抱えている問題だから何かしたいと自然と思えました。

情報社会というご質問も先程いただいたので、同時にお答えをしますと、例えば難民問題を伝えるにしても、難民の人たちがいます、何万人います、大変ですという、のっぺらぼうな情報だとどんどん頭の中で流れていってしまうけれども、私たちが写真と共に伝える上で、何々ちゃんという子がいて、こういう生活をして、こういうことが好きで、でもこういうことに苦しんでいてと伝えることで、誰もが現地には行けないけれども写真を通して具体的な出会いをしたような感覚に近づくことができるかもしれないと思います。

出会いを越える人を変えられるものはないと思うので、例えばシリアのニュースが流れた時に、何々君どこにいるのかな、今何しているのかなと、思いを馳せるような気がします。そのように顔の見える情報発信をしたいですし、自分も情報の受け手としてそういった想像力を働かせていければと思っています。

宮　崎:ありがとうございました。本から、ネットから、家族への愛から、様々なきっかけがあると思いますが、近衛さんは、人道支援一筋53年でいらっしゃいますが、振り返ってどのあたりでそういう感覚を身につけられましたか。

近　衛:私の誕生日は世界赤十字デーの5月8日ということで、偶然、足を踏み込んで53年ということになります。ちょうど小学校に入学したのが第2次大戦が終わって間もなくで、まだ当時は勝者と敗者の間の歴史認識に随分ずれがあったと思います。今日までも、この歴史認識が戦勝国と敗戦国との間で色々と問題になる。そういうことで、歴史一つとっても本当に客観的に見ることは非常に難しいと思います。

それから、今度はイデオロギーの時代になってしまって、東西の対立が生まれた。イデオロギーのレンズを通さないと歴史も見られなければ政治も見られないという時代が非常に長く続いていたと思います。

こういう中で、本当に客観的な中立の意見というのは、どういうものなんだろうかということをよく考えるようになりました。たまたま見つけた本だったのですが、赤十字が第2次大戦中も中立の立場で活動していたことが書かれていました。あれだけの熾烈な戦いの中でも中立を保っていた組織があったということを知り、非常に関心を持ちました。

その後、国連機関も出来ましたけれども、国連はまさに政治の舞台であって、冷戦期間中人類共通の問題に対応するのは容易ではなかった。そういうことを考えますと赤十字というのは、力が十分あるかどうかはともかくとして、1つの人類共通の問題に関われる機会であり、場であるのではないか、そんなことを考えて足を踏み入れたということだと思います。

宮　崎:ありがとうございます。身の回りに様々なきっかけというのがあるようです。だから少し立ち止まって、見つめて、この地球全体に思いを馳せる。そしてその後にできるところから何か行動する、シンク・グローバリー、アクト・ローカリー、まさにその通りのことではないかと思います。

⑤まとめ

宮　崎:さて、色々話し合っている中で、様々な課題も浮かび上がってきました。それから時代の波というものも見えてきたように思います。ここからです。私たちが今後、この大変複雑化する世界の中で、今、どういうあり方を求められているのか。これからどのようにしていきたい、あるべきだ、これは個人としてのスタンスもあると思いますが、例えば国家としてかもしれない、組織としてかもしれない、あるいは地球全体を塊としてとらえていかなければいけない、様々な捉え方があると思います。そのあたりのお考えをまとめとして伺いたいと思います。では、田中さんから順にお願いします。

田　中:先程申し上げたことと関係しますけれども、今度の国際連合の事務総長には、前の国連難民高等弁務官をやっておられたアントニオ・グテーレスさんという人が就任します。彼がここのところよく言っているのは、先程3つの部族が分かれていると言いましたけど、これを統合するということ。今、人道、開発、平和、これを一貫した流れとしてとらえることが重要だということです。

私はその意味で人道問題と開発問題を一緒に議論されたら困るという人たちの意見には率直に言って反対であります。やはり一緒に考えていかなければならない。人道はやらなければいけないけれども、人道措置がある程度終わったら、それでさよならというのでは問題の根本解決にはつながらないと思います。紛争後の社会というのは、往々にしてもう一度紛争を繰り返すということがよく言われています。ですからその意味で申し上げると、今日の会場に来ていただいた方が、人道問題に関する関心を強く持っていただくことは大事なことですけれども、それに加えて一見解決したかに見えるような国であっても、日本や日本人、国際社会は関心を持ち続けてその社会全体が、近衛さんがおっしゃったような強靭な社会、レジリアントな自助ができる社会になるところまでつきあっていくということが必要だと思っております。

宮　崎:ありがとうございます。では、森田さん、お願いします。

森　田:赤十字というのは、アンリー・デュナンという非常に若い青年実業家が戦時下において人道問題という概念を発見し、その緊急対応策を提案し、それが世界的なムーブメントになっていったという経緯があります。赤十字の本質は、冒頭に申し上げました通り、高い理想を実現するというよりも、今起こっている人道危機に対して救急的に緊急的にスピードと成果を求めて対応するんだという、すなわち理念ではなく行動や活動の中に赤十字の本質があるのだと思います。

そして、この人道というものは、基本的人権のさらにベースである我々が最も大事にしなければいけない生命、健康、尊厳に関わることだと思います。この価値観は赤十字の原則というよりも人類が共通に、宗教や部族や民族、国を越えて共有できる価値観ではないかと思うわけです。全ての人がこの部分は共有できる、共有しようという共有価値観に人道を据えることができるのではないか。そういう意味で言うと、赤十字の活動は、赤十字に関わっている方だけではなく、我々市民全体が参加していくことができる、それが世界市民の出発点ではないでしょうか。アイデンティティがどんどん小さくなって、我々意識も小さくなる、すなわち国の機能がだんだん限界を迎えていく中で、その小さなアイデンティティも持ちつつ、同時に人道を尊重する。そしてもし人道の危機があれば、そこに自ら駆けつけてでも何とかしてあげたいという思いを共有する。世界市民の意識を持つことによって、これが今ばらばらになりかけている世界をもう一度、何とか立て直していく契機になるのではないかと思います。

このような考えのもと私自身としては、若い人たちと一緒に自らも学び、発見しながら、教育に携わっていきたいと思いますし、今後も1人の人間として、赤十字の人道という考え方に共感し、そのムーブメントに参加していきたいと思っています。

宮　崎:ありがとうございます。では、安田さん、お願いします。

安　田:皆さん、本当に長い時間にわたり、ありがとうございました。今日は冒頭から取材を続けておりますシリアの方々のお話をさせていただきました。その取材を続けている中、シリアから紛争や色々な要因で傷ついて逃れてきた人たち、特に男性たちからは怪我が治ったらまたシリアに戻って紛争に加わるんだという声を時々耳にします。隣国にいても、例えば仕事に就けなかったり、隣国で沢山の方が温かく迎えてはいるのですけれども、それでも大量に避難民の方々が入ってくることによって、シリア人が来たから国が悪くなったんだ、治安が悪くなったんだというような差別的な言葉を吐かれてしまうこともある。そんな中で居場所をなくした人たちが戦闘しか選択肢がなくなって、また戻っていってしまうという現場も目の当たりにしてきました。もしもこの隣国で彼らが安心して日常を立て直せる居場所があったらどうだろうということは何度も考えました。

そう考えると、赤十字が実践しているような人道支援というのは、ただ単に身体の健康であったり、あるいは身の安全の確保だけではなくて、憎しみではない選択肢を提示し続けるということなのかと思ってきました。

ただ、私自身は人道支援ではなくて写真で伝えるという仕事をしてきて、残念ながら写真を通して直接的には人の命を救うということができません。私たちが何枚シャッターを切っても、例えば震災の現場では瓦礫はどけられないし、どれくらい写真を残したとしても、子どもたちの怪我が快復するわけではない。その仕事に何か意味はあるのだろうかとよく葛藤します。でもそういう時には、現場でお世話になった、支援を続けていらっしゃる方の言葉を大切にするようにしています。「菜津紀さん、これは役割分担なんだ」という言葉です。自分たち支援に携わる人間は、ここにとどまってずっと人に寄り添って活動し続けることはできるかもしれない。だけどここで何が起こっているのかを世界に発することができない。あなたたちは少なくともここに通い続けて、ここで何が起こっているのかを世界に発することができる。「これは役割分担なんだ」という言葉をいただいたことがありました。

今日もこの会場に、先程ご質問や感想をいただいた方もいらっしゃいますが、色々な年齢の色々な立場の色々な職業の方がお集りのことと思います。どんな立場にあって、どんな年代にあっても、必ずそうやって持ち寄り合える役割があると信じて、これからを考えていくことができればと思っております。今日は本当にありがとうございました。

宮　崎:ありがとうございます。いま思わず拍手がわく、でもこういう真摯な態度の方がいらしてくださるからこそ、一歩一歩、地球市民は歩んでいけるんだという感じがいたします。知ることがまずは一番大事だというお話、先程からずっと出ておりますけれども、ではどうやって知ればよいのかという時に、本当に重要な役割をされていると思います。これからもどうぞよろしくお願いします。

それでは、近衛さんです。総括でおっしゃっていただきたいと思いますが、如何でしょうか。

近　衛:言うまでもなく、世界中には人道的な課題が山積にされていると思います。しかし、それを何とかしようという取り組みも色々行なわれている。話に出た世界人道サミットなどもその1つの試みだと思います。そして、また世の中には人情にあふれた人、あるいは善意にあふれた人たちが多くいるのも事実です。そして、これを国際的な連帯のもとで一緒にやっていこうという動きも様々な形で出ているのではないかと思います。例えば東日本大震災の時、世界100か国から

日赤だけでも約1,000億円の救援金をいただきました。また、今年の熊本地震の時にも、約1億5,000万円をお預かりした。日本からももちろん世界に対して色々な支援をしていますけれども、世界からも日本にも支援が寄せられています。

ただ、先程から話が出ていたように、困っている人たちにできることをしたいという気持ちはある。しかしその対象がある意味では非常に偏っている。これはメディアの報道の仕方、あるいは自らの情報の取り方、あるいは我々の広報の問題もあるかもしれませんが、どうしても偏りがある。私は好きな人、あるいは自分たちが同情する人だけに何かをしようというのは、これは人情ではないかとよく言っています。人情というのは誰にでもある。身内が傷ついたり苦しんだりしていれば何とかしたいと思うでしょう。それでは自分の嫌いな人、嫌いな国の人、そういう人たちにも何かしようかというと、なかなかそうはならない。人情をどんな人にも敵味方の区別なくという普遍的な人道へ、ということを我々はよく言います。支援をしなければいけない時は、近いとか遠いとか、憎いとか憎くないとか、そういうことを抜きにして、本当に困っている人たちに公平に支援をしなければならない。ですから人情をいかに人道に変えていくか、普遍的な価値観にしていくかが問われているのではないでしょうか。

日本は非常に恵まれています。そういう中で、海外の悲惨な状況についてもある意味ではなかなか同情しにくいというか、実感がわかないという問題があると思います。それについてはやはりまずは知ることから始めようということ。これについては先程から色々と話が出ました。より深く知ることによって、ただの人情ではなくて、人道という1つのライフスタイルまでに変えていく。その努力がこれから求められていくのではないかと考えています。

宮　崎:どうもありがとうございました。日本には「情けは人の為ならず」という言葉がありますが、今の人情を人道に変えていくという気持ちを心に持ちながら一歩一歩進んでいくことによって、私たち一人ひとりが時代を作り、社会を作り、そして歴史を築いていく、次の日を開いていくことにつながっていくのではないかというお話を伺いました。

今日は、この複雑化する世界の中で、今、求められていることについて深いお話を伺いました。皆さまにも心に大きく届いたもの、響いたものがあったのではないでしょうか。この思いを大切にしながら、これからも少しずつこの世界に対して向き合っていければと思います。 以上をもちまして赤十字シンポジウム2016を終了いたします。皆さま、どうもありがとうございました。

発行日　2017年2月
発行元　日本赤十字社
Email:kokusai@jrc.or.jp